認定NPO法人
アジアの新しい風
第32号
2011年
（夏）

大槌町でボランティア活動をしてきました

6月4日（土）

美しく輝く海と緑。しかし振り向くとそこには目を蔽いたくなる光景が広がっている。暑い一日だった。漁港の船を修復するために必要な線路を被ってしまった砂や瓦礫を、留学生とアジ風のメンバーは黙々と片付けた。『大槌町の復興は漁業から。船の修復が不可欠だがそのためにはこの線路がどうしても必要。これが復興の第一歩です。この御礼は何らかの形できっとします！』と造船所専務が挨拶されたのには、参加者一同胸を打たれた。また国や年齢を超えて、『被災地のお役に立ちたい』という同じ想いで力を合わせた喜びが、汗まみれの全身をやさしく包んでくれた。

みんな笑顔（少しでもお役に立てたならうれしい！）

中国とベトナムからの留学生12名を含むアジ風の被災地ボランティア訪問団は3日発深夜バスで現地入りし、漁港に行く者と避難場所になっている安渡小学校に行く者の二手に分かれた。安渡小学校では、体育館と各教室に大勢の人たちが避難しており、地震・津波から日にちが経ち、最初のころとは異なる不安感や怒り、悲しみを抱えておられるようだった。外の作業とはまた違う、人々の息遣いを感じながらの清掃や炊事場のお手伝いであった。体が不自由な被災者を気遣う工夫があちこちに見られた。特にトイレ。和式トイレに掴まるひもをつるしてあったり、カーテンで目隠しをして椅子のトイレも用意してあった。悪い環境の中でもできるだけ助け合って清潔に暮らそうとする被災者とボランティアの努力が見られた。

傾聴〈被災者の気持ちに寄り添えた手ごたえが〉

漁港の作業を終えたグループと新幹線で後から駆け付けたグループも安渡小に集結。翌日に計画されていた金井優佳さんのコンサートのチラシを配りながら傾聴活動をした。知らない人にドタドタと自分たちの寝場所にまで押しかけられるのは嫌かもしれない、と遠慮がちに声をかけていったが、意外にも多くの方が笑顔で応えてくれ、様々な楽しい会話の花が開いた。それぞれの心の傷をお互いにさりげなく気遣いながらの避難所生活。顔はこちらを向けないけれど留学生たちの純粋でやさしい会話に耳だけは傾けている。その耳も会話の輪に入れている思いやり。参加してくれた留学生ばかりでなくアジ風会員にとっても本当に貴重な経験であった。

沿岸部は大打撃を受けて宿泊施設はないため、花巻にもどって一泊し、疲れを取った。夕食後、集会を開くと、素晴らしい感想が次から次へと。すべてをまとめて冊子にしたいと思わせるほどであった。行動は金なり！実際に臭いや景色の中に身を置き、汗を流し声を聞いた多国籍老若男女が、同じ風を分かち合い心に沁みこませた夜であった。

翌5日（日）

再び安渡小学校へ。いよいよ金井優佳さんのコンサート。校舎玄関前にビニールシートを敷いただけの客席。舞台は校舎に上がる少しうち上がった場所。張慧さんの名司会で、金井さんの澄んだ歌声が安渡小学校に広がった。被災者の中からハーモニカを吹く女性、手話ができる小学生も飛び入り参加してくれ、和やかな心温まるコンサートになった。校庭に建設中の仮設住宅作業員の方々が手拍子をして一緒に口ずさんでいたのも印象的だった。

ベトナム・ハノイの学生が心をこめて折ってくれた千羽鶴も安渡小学校の生徒へとしっかり手渡された。込められた気持ちは大槌町ばかりでなく日本全土に伝わることを確信できた鮮やかな色彩の力強い千羽鶴だった。

〈千羽鶴の贈呈式〉

〈区さんによる四川と東日本大震災の比較のお話〉

四川大地震との具体的な比較を示しながら励ましの言葉を述べた区さんや留学生に被災者の方々は大きく頷いた。

今回のボランティア活動実現の為に多くの皆さんより甚大なご協力とご寄付をいただいたことに心より感謝します。

清華大学読後感想文コンテスト結果

今年も清華大学において、読後感想文コンテストを実施しました。入賞作品は別表の通りです。今年は清華大学創立100周年ということもあり、清華大学特別賞が設けられました。

例年なら6月に、このコンテストの表彰をかねて清華大学の訪問旅行が行われますが、今年は3月の大震災の影響で、訪問旅行は取りやめになりましたので、6月22日の学生集会で、ヒョウ先生が入賞者に賞状と賞品を渡してくださいました。

〈王成教授 宋歌さん 劉偉権さん 馬琳さん〉

一位 清華大学特別賞	心の支え―「坊っちゃん」からの思い	馬　琳
二位	「フリーター、家を買う」の感想文	劉　偉権
三位	「坊ちゃん」読後感	宋　歌
努力賞	坊ちゃん―人間としても不可欠な存在	麦　麗思
努力賞	「フリーター、家を買う」の読書感想文	李　苑荷
努力賞	「坊ちゃん」から夏目漱石の心を見る	張　亞麗
参加賞	「坊ちゃん」を読んで	范　梦姬
参加賞	忘れてならない一冊　（キッチン）	韓　方舟

課題図書

坊っちゃん	夏目漱石
フリーター家を買う	有川浩
キッチン、満月―キッチン2	吉本ばなな

今年は応募者が8名ということもあり、少しさびしいコンテストでしたが、清華大学の創立記念行事があったこと、感想文を指導してくれるアジ風からの派遣の日本語教師がいなかったことを考えると、忙しい時間を捻出して自力で書き上げたこの8名に拍手を送りたいとおもいます。

認定NPO法人 アジアの新しい風
〒154-0016　東京都世田谷区弦巻2-18-22-414
TEL/FAX 03-5426-6714
http://www.npo-asia.org　new-wind2006@npo-asia.org

Iメイト便り　Iメイトって？Internet,愛,(出)会いのアイ

今回は、読後感想文コンテストの結果、１位と２位に輝いた２名の学生とそのIメイトに、メール交流の様子を公表いただいた。予想に反して、学生はIメイトに殆ど相談せずに完成し、Iメイトの竹宮さん、黒瀬さんとも受賞については事務局から初めて知らされたという。学生が独力で書きあげたことを褒める内容のメールになりました。

（清華大学Iメイト交流コーディネーター　上　高子）

竹宮聡さん→馬琳さん（5月22日）

確かに、昔の作品だし、日本語の学習を初めてまだ長くないうちに読みこなすのは難しいとは思います。でも、私はこう思いますよ。まず、日本語で最後まで読んでみる。わからないところがあったら、飛ばしながらでもかまいません。時間があれば辞書を引いたり、調べたりするのが良いです。でもその時間がなかったら、とにかく、読みながら何が書かれているか、本の中の状況をなるべく頭の中で推測してみる。そうやって、一通り読んだ後、中国語の翻訳を読んで、「あ～、こんなことが書いてあったのか～」と確かめる。このようなやり方をすると、自分の頭でいろいろ想像するので、とても印象に残るはずです。最初に中国語の訳本を読むのはお勧めできません。

流れを理解するのは簡単ですが、後で日本語を読むとき、すで何が書いてあるのか知っているため、あまり日本語の印象が頭に残りにくいでしょう。結局、学習の効果が乏しくなってしまうと思います。では、頑張ってね！O(^o^)o

馬琳さん→竹宮さん（5月22日）

ご多忙のところ、貴重な時間を割いていただき、メールをご覧になっていただきまして、本当にありがとうございました。感想文について、ご意見を聞いて、竹宮さんの話はとても理にかなっていると思います。

だから、その後、一週間で私はまず日本語で「坊っちゃん」を最後まで読んでみていました。最初に、文句は非常に難しいだなあと思っていましたが、読んでいるうちにそんなに難しくないという感じがありました。あるわかりにくいところに対して、中国語の翻訳を読んですぐわかりました。そして、そろそろ感想文を書こうと思います。きっと頑張ります！

竹宮さん→馬琳さん（6月25日）

先日、読書感想文コンテストで、馬琳さんが1位になったと聞きました。おめでとう！馬琳さんの努力の賜物だと思いますよ

劉偉権さん⇒黒瀬義郎さん（6月17日）

返事はかなり遅くてごめんなさい。実は、この間、私は期末テストのために、必死に準備しました。ほぼ毎日朝八時から夜十時までずっと自習室で勉強して、大変ですけれども、とても充実の生活を楽しみました。今はもう無事に終わって、ほっとしました。

先週、今回の読後感想文のコンテストに２位入賞のメールが届きました。予想外でとてもうれしかったです。これは黒瀬さんからたくさんの応援やサポートをいただくのおかげで、いろいろ感謝しております。しかし、私の書く能力はまだ不十分という現実ははっきり知っており、今からもっと頑張ります。

黒瀬さん⇒劉偉権さん（6月17日）

その後お元気にて学業に励んでいらっしゃることと思います。

さて、今年度の読書感想文のコンテスト、劉さんは見事に２位入賞ですね。本当におめでとうございます。私はとても嬉しく思っています。今回は学校の記念行事や試験の日程の関係でとても忙しかったようなので、私は劉さんが感想文を提出して下さるかどうかとても心配していました。前にお話ししていたように私は審査委員を務めましたので、立場上、劉さんの選んだ図書の名前を事前に聞いたり、お書きになった文章に対するアドバイスなどは全くしませんでした。従って、劉さんの作品が応募作品の中にあるかどうかも分からず、ただ公平な立場からの選考のみを心がけました。そして、選考が終わった時に初めて２位の作品が劉さんのお書きになったものだと知ったのです。劉さんの感想文の内容は素晴らしいものでした。そして、何よりも嬉しかったのは、劉さんが日本人の力を借りることなく、自分独自の力で、しかも締め切り期限に間に合うように書き上げ提出したということ。私は劉さんの努力を高く評価します。（後略）祝小劉学習進歩！

・・・編集後記・・・

3・11の東日本大震災について外国からの評判では日本国民一流、官僚二流、政治家三流とのことでしたが正にその通りとの実感です。その中でアジ風が被災地ボランティアを企画し大勢の会員、留学生で大槌町へ赴き、瓦礫の撤去、被災者の慰問と激励を行ない地元の方々に感謝されたのはありがたいことでした。参加は出来なくても義援金として協力下さった方々にもこの場を借りてお礼申し上げます。（新井　雅夫）

日本国民を狂気の戦争へと駆り立てた「愛国心」という言葉は嫌いだ。エゴ（利己）の延長線上にあると思うから。しかし今回、被災地ボランティアに留学生を連れて行こう、と思い立ち、彼らが貴重な体験をしてくれたこと、「日本語を学んでよかった」と聞き、喜んでいる自分は、実は「愛国的」ではないか、と自分に問いかけている。いや、このような災害は日本に限ったことではない、地球上どこにでも起きうることで、それによく対処できる人物になってほしい、と思ったからだと自分を納得させている。（上　高子）

今回の被災地ボランティア特集、いかがでしたか。貿易大から届いた千羽鶴がきっかけで実現したボランティア。留学生達にすばらしい感動を残したようです。がれきはまだまだ、原発は一進一退、政治は泥沼です。しかし、一般家庭や企業は電力不足を忍耐と知恵で乗り切ろうとしています。私もゴーヤを植えてみました。暑い夏の到来。皆さまどうか熱中症にお気を付けください。（藤原　玲子）

Canadian Humic Acid
無農薬・無化学肥料農業
への招待
農薬と化学肥料に頼った農業をあらため、自然の力にあふれる農産物を広めたい。
氷河の大地からうまれた「地力の素～カナディアンフミンHNC～」とともに、私たちは安全で地球環境にやさしい食料生産を目指します。
㈱ピイアイシィ・バイオ
http://canadian-humic.com
アジ風の活動を支援する法人会員です

会員の投稿ページ　　原稿をお寄せ下さい

避難所校庭でのボランティアコンサート

アジ風で被災地を訪れる計画があり、そこでボランティアコンサートをしませんか?と事務局からお誘いをいただいたとき、迷うことなく参加を決意しました。

6月4日、新幹線で新花巻駅に着き、チャーターバスに乗り換え大槌町へ。はじめ車から見る景色はとても綺麗でしたが、定規で線を引いたように、ある地点からガラリと景色は一変してしまいました。

私達は避難所の安渡小学校を訪れました。果たしてどんな言葉をかけたらいいのか、はじめ迷いましたが、いろいろな方とお話ができました。その中で、特に印象に残ったおばあちゃんがいます。そのおばあちゃんは昭和8年の津波の時も家を流され、そして今回も。「これも運命だね」と、私の耳元で、津波の歌を歌ってくれました。「何事もね、勉強だよ。どんな小さなことでもね。コンサート頑張って歌うんだよ。見に行くからね。」と逆に私のことを気遣ってくれました。

コンサート会場は校庭。ブルーシートを敷いた客席。皆さん、聴きにきてくれるかしら?と少々心配でしたが、先ほどのおばあちゃんを始め、多くの方が集まってくださいました。

はじめの曲は故郷。避難所内でハーモニカが吹ける女性がいて、急遽、一緒に演奏する事になりました。その女性も恥ずかしがりながら喜んでくれました。(アジ風坂上さんのハーモニカを拝借)これから歌い始めようとしたとき、手話が出来る女の子も急遽飛びいりし、コンサートは大盛り上がりとなりました。その他、浜辺の歌、青い山脈、などをみんなで一緒に歌いました。自作の応援歌「故郷からGetting Better」を歌ったとき、ずっと我慢していた涙が抑えきれなくなってしまいました。でも、皆さんが温かく拍手を下さり、励ましてくださいました。最後はアジ風のテーマソングで終了しました。

滞在中は逆に被災者の皆さんからいろんなものをいただきっぱなしでした。結局、私は何の役にも立てなかったかもしれませんが、避難所の皆さんと寄り添うことが出来、気持ちを少しだけ共有することは出来たかな、と感じています。

(正会員　金井優佳さん)

(編集部注　アジ風のテーマソングを歌っているシンガーの「U」さん)

がれきの中にけなげに咲くアヤメ

テレビで見る被災地の惨状に、私達にも何かできることはないかと思っていた時に、アジ風のボランティア募集を知り、家内と参加を決心しました。ただ、古希の身に夜行バスは不安でしたが、なんとか皆さんについて行くことができ、このような機会を与えてくれたアジ風に感謝しています。

〈後列左が岸本さん〉

初日は、留学生と一緒に造船所で土砂の除去作業をしました。寝不足に加え、水を含んだ土砂は重くキツかったが、作業を終えた時に「船が動き出せば、町に希望が見えてくる。この恩は必ず返します」と感謝され、こちらが感激しました。

安渡地区は海辺の漁村で、周辺の防波堤は寸断され、建物は基礎が残っているだけの文字通り根こそぎの状態。所々に瓦礫と化した家屋、車、漁船が山となっており、あちこちで未だ不明者の捜索が行なわれていました。ただ、瓦礫の中に健気に咲くアヤメが印象的でした。

翌日は避難所を慰問しましたが、命からがら逃げたこと、目の前で家族が津波にさらわれたこと、親を亡くしたことを知らない孫娘のことなど、慰問と言いながら慰める言葉もなく、ただ話を聞くばかりでした。むしろ、私たちに気を遣ってか、ぽつりぽつりと津波の話をしてくれる被災者に、東北人の強さを感じました。又、村では昭和八年の三陸地震の教訓に「地震てんでんこ(地震が起きたら津波がくるので、人のことを構わず直ぐ逃げろ)」の言伝えがあり、今回の津波でもその教訓が生死を分けたということです。

最後に、一旦は母国に帰った留学生たちが、今回のボランティアに参加し、土砂の除去に汗を流し、被災者の話に耳を傾ける、その姿に感激したことを付け加えます。

大津波主なき家(や)のあやめかな

梅雨晴や津波残せし重きもの

梅雨晴間途切れつ語る津波かな

(正会員　岸本圭司さん)

会員紹介

黒瀬 義郎さん
並々ならぬ中国ファン

「私のIメイトの学生、劉偉権君(清華大2年生)が読後感想文コンテストで2位になったんです。立派な作品でした」と嬉しそう。実は黒瀬さん今回のコンテストの審査員。「彼から相談はあったが、それは断った。名は伏した作品を読むだけの審査をしました。後で彼と知って驚きました」と、付け加えた。「皆、日本語力はすごい。が参加者が少なかったのが残念」とも。

アジ風の入会は昨年2月。別のNPOの会報でアジ風の会員募集を知って参加した。「私は新参者ですが、珍しい会ですね。皆さんの活動、会報発行、交流のきめ細かさ、留学生の支援などの姿に敬服しています」と、ユニークさに共感を持った。

実は黒瀬さん、並々ならぬ中国ファン。「今、思うと、大学時代、『発展途上国』をテーマのゼミに入ったのが、きっかけですかね。退職後の8年前、早大大学院の科目履修生募集で見て、『中国の経済発展』講座に応募、2年間学んだ」。それからが凄まじい取り組み。「中国語を、学ばなければ」と思い立ち、週1で日中学院に6年間、その間、北京大学、大連外国語学院に語学の短期留学を重ねた。更に中国語で漢詩を読む講座を受けて、漢詩の故郷も訪問した。それまで海外旅行の経験がなかった黒瀬さんは中国にのめり込み、「数えてないけれど20回近く訪中」。中国からの留学生との付き合いも豊富。

日中関係に話を向けると「政治の問題ですね。日本側に問題ありますね。向こう(中国)から見たら付き合える相手か、と不信感を抱いているのではないか。誰を相手にすれば良いのか分からない」。「ある時、店員から『日本は戦争が好きですか』と尋ねられ、必死に日本は平和な国だと説明した。日中、お互いに相手を知らな過ぎですね。私は日本で『何故、中国』と変に見られる。先入観で見る。中国も変わっていくのだから、決めてかからない方が良い。双方が訪問し合うのが一番だと思う」。

「アジ風の活動、若い人の支援はいい。次代を担う、しかも日本語を学ぶ志のある人達ですから…」。劉偉権君は秋に九州大学に留学。黒瀬さんは心待ちにしている。

(インタビュアー　編集ボランティア　園木宏志)

派遣教師の現地報告

タイの電子辞書事情
三角 友子 先生

語学の勉強に欠かせないのが辞書ですが、タイではまだ多くの学生が紙の泰日辞書を使っている人が多いと思います。私の「お助けウーマン」の3人の4年生も、ひとりが泰英辞書の電子辞書を持っているだけで、泰日となるとやはり紙の辞書だそうです。そこで、日本で学んでいるタイの留学生に聞いてみたところ、一応電子辞書はあるようです。値段は一万四千バーツ(カシオ製)、給料まるまるといったところでしょうか。日本では買えず、タイでは通販扱いのようです。

ところが、今日、私が担当する三年生の作文の授業に出てみてびっくり。なんと、iphoneという携帯電話の「アプリ」から泰日辞書がダウンロードできちゃう。学生の中にはipadというタブレット型コンピューターを持ち込む学生もいて、これだと、iphone以上にサクサクと調べられちゃう。タマサート大では、学内Wi Fi(ワイヤレス・ネットワーク)が使えるので、どこでもこういうことができるのですね。

iphone、ipadともタイでは超高級品。ちなみに私がタイで買ったiphoneは約2万8千8百バーツ。私の一か月の給料以上です。学生が小遣いで買えるものではありません。それでも、親は勉強のために買ってあげちゃうのでしょうか。ともあれ、電子辞書から一足飛びに時代が進化してきていることを感じております。(タイ・タマサート大学派遣教師)

< ipadを使う学生 >

二つのエネルギーの中で
増本 純子先生

窓を開けても玄関を出ても赤の国旗。行き交うバスはみな赤の張り紙。通りを歩いても赤の旗。赤のエネルギーは「何かが始まる。」と思わせる。その光景に目を奪われていると、朝、アパート前の市場拡声器から大音量で「~ベトナーム」「~ベトナーム」の演説と歌が聞こえてきた。ベトナームの抑揚が頭から離れない。これが二週間位続いた。「何があるのだろう。」国会議員選挙だった。町に貼ってあるパスポート大の写真は、候補者だったのだ。五年に一度の選挙が五月二十二日に行われた。二十日、三人が授業を欠席。選挙で故郷に帰ったのだという。十八歳から選挙権があるベトナムでは棄権は極めて稀とか。選挙日、旧市街に行ってみた。どの会場も赤の旗から一目で投票所と分かった。

六月七日、貿易大の千羽鶴が大槌町に届いたと連絡が入った。学生達の「頑張って、応援しています。」のひたむきで温かい祈りが海を越えて届いたのだ。「先生、今晩は興奮して寝られそうにありません。」この言葉に代表されるように、アジ風の弛まぬ努力と強い意志と温かい心で実現した震災ボランティアは、貿易大の学生にも希望と勇気を与えてくれた。温かさは回り、貿易大の学生に、次の一歩を踏み出すエネルギーを与えてくれたと思っている。感謝。

< 国会議員選挙の投票所 >

(ベトナム・貿易大学派遣教師)

卒業の季節
郝 文艶 さん

会員のみなさま、こんにちは!清華大学日本語学科四年のかくです。どうぞ、よろしくお願いいたします。

汽車に乗って大学に向かうのは昨日のことみたいですが、私たちはもうすぐ卒業します。

6月11日(土)、外国語学部が所属する人文社会科学学院の卒業パーティーが行われました。日本語学科の四年生、日7の皆さんが一緒に舞台に立って踊りました。また王晶さんなどの四人はセーラムーンのコスプレをやりました。

6月22日(水)、日本語学科の二年生が歓送会をしてくれました。(もともと三年生がやるのは普通ですが、三年生はほとんど日本に居るので、二年生がやってくれました。)日本語学科の先生方も来ていただいて、あたたかい言葉をいただきました。「これからも頑張ってください。」「いつでも自分が『清華人』だっていうことを忘れないで」と。

四年間の大学生活、今振り返りみますと、いろいろなことが頭に思い浮かべます。一言でいえば、清華に入って、本当に良かったです。日本語学科に入って、アジ風の皆様と出会って、本当に良かったです。本当に、どうもありがとうございました。

<青-洪貴花さん、緑-王晶さん、黄-趙明鑑さん、赤-趙楠さん>

(中国・清華大学四年生
Iメイト交流アルバイト生)

派遣教師のごあいさつ

北京の新しい風をお届けします
磐村 文乃

9月より、「アジアの新しい風」北京事務局を担わせていただくことになり、光栄に存じます。この10年、東アジアで日本語教育に携わり、「私にできること」を問い続けて参りました。アジアの日本語学習者との草の根交流によって、相互理解の促進、多文化共生を実践する「アジ風」の活動は、私にとって新境地となるでしょう。

中国の日本語教育も交流、異文化間コミュニケーションのための日本語教育へシフトしています。微力ながら、「北京の新しい風」を皆さまにお届けし、想いをつなぐ役割を果たすべく努力する所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

(経歴)　中国・韓国の大学で日本語教育に従事。早稲田大学大学院博士課程在籍。

ベトナムの学生との交流の懸け橋となります
藤原 美代子

ハノイ貿易大学に派遣されることになった藤原美代子です。昨年一年間、ハノイの日本語学校で講師をしていましたが、貿易大学の学生も勉強に来ていました。日本の文化に興味をもって学習しており、社会の動き、世界情勢にも関心がある様子が、会話から伝わってくる優秀な学生です。その貿易大学で勤務できることを、光栄に思います。

かつての貿易港ホイアンで九七・九八年に行った調査・研究活動が、私のベトナムとの最初の接点となっています。一七世紀初頭、モンスーンの風に乗って朱印船が行き来し、日越の交易が繰り広げられたベトナムの地に今、「アジアの新しい風」に乗って、日本語を学ぶ貿易大生と学習を支援する日本人との交流の掛橋となるべく派遣されることに、ロマンを感じています。よろしくお願いいたします。

(略歴)　神戸市の中学校で社会科教師として勤務。2010年退職し、ハノイの日本語学校で一年間専任講師として勤務。